

『東福仏通禪師十牛訣』における第七図の解釈

加藤 みち子

一 大慧、『十牛訣』、なぜ第七図の解釈に注目するか

本稿は、痴兀大慧（一一二九～一三二二）が『東福仏通禪師十牛訣』（以下『十牛訣』とする）において示す第七図の解釈には密教思想の影響があると論じるものである。

『十牛訣』は、中国宋代の禅僧廓庵師遠（生没年不詳）撰『住鼎州梁山廓庵和尚十牛図頌并序』（以下『十牛図』とする）の注釈書であるが、『十牛訣』の挿図のうち第七図に、廓庵本の『十牛図』との興味深い相違がある。廓庵本の第七図は牛の姿が消えているが、『十牛訣』では牛が描かれているのである。現存する『十牛訣』のテキストは残念ながら江戸時代に版行されたもの数種類のみであるが、筆者が確認した四点のうち、⁽¹⁾図そのものが収録されていない一本以外ではすべて第七図に牛が描かれている。

それでは、『十牛訣』の著者である仏通禪師痴兀大慧はど

ういう人物であろうか。大慧は、東福寺開山円爾弁円（一一〇二～一八〇）の弟子で、東福寺第九祖となった人物である。彼は円爾の立場を継承して天台密教の深い素養の上に台密禪とも言うべき思想を築いており、更に安養寺流という密教流派の大成者でもある。『十牛訣』以外の文献では、円爾の講義を大慧が記述した『大日経見聞』、『瑜祇経見聞』、大慧の講義を弟子が記述した『東寺三宝院印信等口決』⁽²⁾など密教系の典籍が残されている。

二 『十牛訣』の研究動向と筆者の立場

先行研究では、『十牛訣』は大慧には珍しく密教についてはほとんど言及しない著作とされているが、筆者は、大慧の密教的思惟は『十牛訣』にも影響していると考えている。⁽³⁾例えば大慧は、『十牛図』の第一図から第七図を教門、第八図以降を禅門とした上に、有覚門本有と無覚門本有という枠組みを用いて『十牛図』を解釈するが、後述するようにこの枠

組みも大慧の密教思想と関連すると考えられる。

本稿では、『十牛訣』第七図の挿図に牛の描かれる理由を考える一助として、大慧の思想を以下の二点から述べていこう。第一に、大慧は本覚思想に基づいて『十牛図』を解釈している。それは、大慧が読み変えた『十牛訣』の内容で確認できる。第二に大慧の『十牛図』全体の解釈に密教の影響が見える。例えば、『十牛図』解釈のバックグラウンドに無覚門本有、つまり、毘盧遮那仏が存在する。

三 大慧における第七図の解釈

本節では、大慧の『十牛図』第七図解釈について以下の三点から考察する。第一に大慧は第七図の題に「到家」を加え、廓庵本の主題である「忘牛」とは異なる解釈をしている。第二に、大慧の「家」は「本覚家」であり、更に「本覚牛」と言い得ると主張している。そして第三に、大慧のいう「本覚」は、教内教外に通じる「真源本有（本有之体）」であり、大慧は第七図を高く位置づけている。このような本覚重視の傾向は本覚思想の基本骨格と言ってよい。

まず、廓庵本の『十牛図』第七図は、「牛の不在（忘牛）」こそが意味を持つ図像であることを確認したい。『十牛図』は、人の牛捜しに始まり（第一尋牛）、牛を見つけて（第二見跡、第三見牛）、牛を調教し（第四得牛、第五牧牛）、牛と人の

『東福仏通禪師十牛訣』における第七図の解釈（加藤）

姿が順次見えなくなり（第七忘牛存人、第八人牛俱忘）、本源への還帰（第九返本還源）を経て、最後に町に出る（第十入廓垂手）までのプロセスとなっている。このプロセスの中で第七図は牛の不在こそが主題であると考えられる。なぜなら、第七図は「忘牛存人」と題され、牛が消え人のみ残る境地を指ししているだけではなく、「人牛俱忘」と題される第八図、すなわち人も牛もいなくなる境地の前段階として描かれていると見る事ができるからである。つまり「忘牛」に焦点を当てて解釈している。

これに対し、大慧は、第七図の題として「到家忘牛」を採用し、「到家」に焦点を当てた解釈をしている。具体的には「如是所言廢証無得所謂積衍論云以始覚者還同本覚」（第二冊三オ）すなわち、証（悟り）という事も廢され悟りを得るといふ事もない境地であり、『釈摩訶衍論』に言う、始覚が姿を消し本覚の根源に還帰し同化する境地である、と説明している。つまり、第七図を、本覚に還帰する「到家」の境地と解釈しているのである。

他方大慧には、第七図の「家」を「本覚家」（第二冊一ウ）と呼び、更に「本覚牛」の所在を許す解釈がある。例えば「雖忘始覚牛不忘本覚牛但以始覚同本覚時其本始不二非始非本是名為家」（第二冊四ウ）すなわち、始覚牛は消えても「本覚牛」はそこに残っている、但し始覚が本覚に同化して始

覚・本覚の相対が解消された始覚でも本覚でもない境地が「家」である、と述べられている。始覚でも本覚でも無い境地に到るのであれば、その境地には本覚も無くなると考えるのが自然であろう。にもかかわらず大慧は敢えて「本覚牛」を許す表現を加えているのである。これは何故であろうか。

大慧は「本覚牛」を許す文言を記したあとで、その理由を「始本不二非始非本是名為家」と述べる。そして、当該の文では牛が教道法、家が証道法の比喻であるから、それでは理由説明にならないのではないか、という問いを自ら設定している。大慧は、直接「本覚牛」については語らず、以下のような答えを提示している。まず天台教学の実教の中の次第而二と不次第不二の違いを示した上で、第七図で語られる「家」とは、相対的な「次第而二」の境地ではなく次第や相対の無い「不次第不二」の境地であるという。そしてこの境地には、教道法の比喻である「牛」と悟りの境地の比喻である「家」との相対は無いとした上で、その不二の境界において、不二の家が立ち現われてくるのであるという。⁽⁴⁾以上の説明を以て「本覚牛」の問題に当てはめるならば、大慧は、第七図の境地においては、始覚と本覚の対立を超えた、いわば不二の牛とも言うべき「本覚牛」を認め得ると答えていると解釈できよう。

しかしなぜ大慧は「始本不二非始非本」の境地の上に更に

「本覚牛」の所在を認める解釈をするのであろうか。それは大慧がこの境地を教内教外に通じる「真源本有（本有の体）」であると高く位置づけ、真源本有に還る事を重視している事によると考えられる。

大慧によれば「当此到家忘牛極証彼本有真理」（第二冊三ウ）とあるように、「到家忘牛」という第七図の境地で証されるものは「本有真理」であり、それが教門の究極の悟り（極証）だとされる。そして「真源本有普通教内教外也」（第一冊七ウ（八オ））とあるように、真源本有は、教門と禪門（教内教外）で異なるものではない、とされているのである。つまり、大慧における第七図の境地は、教門の究極の悟りの境地であると同時に、教内教外共通の「本有之体（真源本有）」を顕すものとして高く位置づけていると読み取る事ができるのである。

ではなぜ大慧は、第七図に対して、このように高い位置づけを与えているのだろうか。それは、大慧における『十牛図』全体の解釈に密教の影響があることと関連する。この点については節を改めて述べよう。

四 大慧における『十牛図』全体の解釈

本節では、大慧が『十牛図』全体を無覚門本有へ還帰するというテーマで解釈している事、その文脈で第七図が重視さ

れている事を述べる。そして大慧の別の著作では、無覚門本有は毘盧仏の体であり秘密の宗旨であると述べている事から、このような解釈の背後には密教思想が影響しているという事を示したい。

まず、大慧が『十牛図』全体を無覚門本有へ還帰するというテーマで解釈している事を説明しよう。大慧は有覚門本有と無覚門本有という枠組みと、教門と禪門という枠組みの二つを用いるが、いずれも無覚門本有への還帰をテーマとしている。

第一の枠組みから見ている。有覚門本有とは、大小権実顕密教内教外というさまざまに立てられた仏教の教説のことであり、無覚門本有とは衆生と仏などの相對を離れた証道法であると位置づけられている。ここでは、大慧自身の立場とされる禪門も密教も天台も含めて、言説によって立てられた教道法はすべて有覚門本有であると述べている。これに対し、悟られる法が無覚門本有であるという。そして、大慧の主題はいかにして有覚門本有から無覚門本有へ入るかという事なのである。

第二は『十牛図』に即した枠組みで、第一図から第七図を教門、第八図と第九図を禪門とする枠組みである。これは教禪相對の立場から見た枠組みであり、第一の視点から見ればすでに有覚門本有の議論である。ただし大慧は『十牛図』を

向上する十段階のステップとは見ておらず、教門の極証として語られる内容(第七図)と禪門の極証として到る境地(第九図)は同じであると位置づけている。そして教内教外に共通する境地においては真源本有が顕わになるといふ。これは無覚門本有の立場である。つまり、第二の枠組みも実は『十牛図』という教禪相對の立場(有覚門本有)を通して、教内教外に共通する極証(無覚門本有)に入るといふ事がテーマであると見ることが出来る。

以上のように、大慧が二つの枠組みをもって語りたいのは、結局、有覚門本有(施設教門)によって、無覚門本有という教内教外に共通する悟りの境地(極証)に入るといふ事なのである。

では、『十牛図』全体の中で、なぜ第七図が重要になってくるのであろうか。それは大慧が第七図から第八図への転入こそ、無覚門本有への還帰をテーマとする『十牛図』の核心であると捉えているからである。教門の極証である第七図は、言説を以て表し得る究極の悟りの境地である。この境地の説明によって、本来語られざる無覚門本有について語るといふのが、大慧による『十牛図』解釈の要となつていふのはなからうか。そしてここで「本覚牛」を許すといふ大慧独自の解釈をする背後には、無覚門本有すなわち無覚門に關して本有に力点をおく大慧の思想的立場がある。この解釈は大

慧の密教的思惟に由来すると考えられる。

例えば、大慧は『十牛訣』とは異なるテキスト『東寺三宝院印信等口決』においても無覚門本有と有覚門本有という枠組みで仏法の全体を語っているが、そこで無覚門本有を「内外俱皆毘慮仏体」であり「法爾正覚」であると述べている。⁽⁵⁾つまり、大慧は、証道法を、無覚門と言いながらも本有という方向で捉え、しかも真源本有を「毘慮仏（大日如来）」であるとしている。このように大慧は、『十牛図』全体の解釈を密教的な思惟で行ったと考えられるのである。

五 結

痴兀大慧は、廓庵本『十牛図』の注釈という体裁を取りながら、第七図に牛の所在を許す解釈をし、『十牛図』全体を有覚門本有から無覚門本有へという視座で読み解く。このような解釈は廓庵本『十牛図』からの大きな逸脱であると言つてよい。そしてこの独自の読解の背景には、大日如来を中心に一切を解釈する密教思想が横たわっているのである。

- 1 筆者が確認したのは、一、無刊記版本・三重県鈴鹿市龍光寺蔵、二、無刊記版本・駒澤大学蔵、三、正保二年（一六四五）刊記版本・駒澤大学蔵（図なし）、四、無刊記本・内閣文庫蔵の四点である。

- 2 『東寺三宝院印信等口決』のほか、安養寺流の密教典籍が真

福寺に多数所蔵されている。

- 3 山口與順「臨濟宗東福寺派と天台宗（一）」（『山家学会紀要』創刊号、一九九八）、高柳さつき「日本中世禪の見直し——聖一派を中心に」（『思想』九六〇、二〇〇四）参照。

- 4 「於実教中者次第不次第有而二不二而二次第教道不二次第証道。所謂天台如云法報応 三身同居方便実報寂光四土是教道如云三身即一四土不二等是証道也（中略）如是道理法義即到証道家得証相応然則三土之外寂光為家亦非二身之外法身為入証道人家四土不二寂光為家三身即一近江為人若到四土不二寂光家三身即一人遙出仏祖教門遠超權実人也。」（第二冊四ウ五オ）。

- 5 「無覚門本有法者。直示一切衆生色心、正明正覚仏体也。然則有覚門、本有表必在、迷裏定在覚、無覚門本、有内外俱皆毘慮仏体（云云）此無覚門本有、独在秘密宗旨、更非余分。」（痴兀大慧述、寂雲伝、能信筆『東寺三宝院印信等口決』真福寺蔵・折本一帖）。

※本稿における『東福仏通禪師十牛訣』の引用は、『禪宗典籍叢刊』第二巻（臨川書房、一九九九）所収・影印版より行い、原本の冊数と丁数のみ示した。

（本稿は、平成二十五年度科学研究費補助金・基盤研究（C）研究課題番号「二四五二〇〇九七」による研究成果の一部である。）

〈キーワード〉 痴兀大慧、『十牛訣』、本覚、無覚門本有、密教（公益財団法人中村元東方研究所専任研究員・博士（哲学））